“バリケードについて”

上野昂志

テレヴィの画面を眺めているこちらの現実とまったく同一の時を刻んで動いている円い時計がつねに画面の中央部に現れるこの講堂内の占拠は、現代にとってまさしく象徴的であったけれども、ところで私が先に、逮捕されるまでの時間をただただのばす「持続」の意味のみをそこからとりだしたただけなのは、それがひとつの場所にたてこもっている事態を貫こうとする「守勢」の努力にほかならなかったからである。

〈中略〉………ここで敢えて図式的な概括にまでひきもどしていえば、その「守勢」のもたらす精神的鼓舞は、兵器工場へはいって戦争廃棄のビラをくばる僅か少数の若いアナーキストが萌芽的にはらんでいるところの一種の無限発展性、「攻撃」が必然的にもたねばならぬところの技術と理論の「発展」のかたちをもたないといわねばならないのである。

（埴谷雄高「象徴のなかの時計台」『群像』三月号）

確かに埴谷が指摘しているように、機動隊の攻撃にさらされて余儀なく「守勢」に立たされている場合だけでなく、占拠には直接的な「無限発展性」というようなものが感じられないように見えるが、しかしそれは、その行為の裏側に「発展性」をかくしもつという形において、いわば運動のモメントとしてあるのである。たとえば大学なら大学を占拠することは、単に闘争の手段として、あるいは闘争の拠点として意味をもつだけではなく、大学の機能が停止され、その日常が否定されることに、より意味がある。というよりも、機能を止めることによって、これまで私たちの内部で意識する間もなく、既にあるものとして大学が存在し続けてきたその日常が放棄される、そのことのうちに占拠という行為の意味がかかっているのだが、その日常に対する攻撃性は、形としては「守勢」のように見えながらも、なお無限に発展する運動の契機にほかならないのである。それは、何も抽象的な「バリケード」のことではなく、机、椅子、ロッカーを積み上げ打ちつけた現実のバリケードそのものが、それらの素材の、かくあるべしと定められた機能を奪いとることによって作られている。そのことの意味である。この間の運動を一言で言うならば、赤瀬川原平の言葉「ラムネびんはオブジェを通過してラムネ弾となる」が、もっとも適切であろう。無論、現実のラムネ弾なるものは、ただ必要がうみだした工夫のひとつに過ぎないのだろうが、しかしその過程を高速度撮影でとらえるように眺めるならば、ラムネびんはびんとしてのその機能をはぎとりものとして見るような眼差しを通過することによっ

て、別なものに作りかえられるのである。ラムネ弾だけではない、道路の敷石も又、割られて投石用の石となる一瞬、この過程をたどっているはずである。

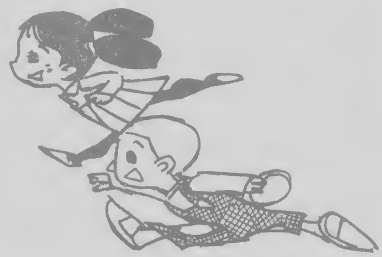
たとえば、東京の都心部の道路は、来年の春までには、銀座の御影石歩道を除いて全てアスファルト舗装にされるという。黒くのっぺりと、どこまでも続くかに見える新しいアスファルトの表面には、道路を道路としてのみ機能させようとする権力の意志が透けて見えるのだが、同時にそれは、日常というものの、頑な表情でもある。アスファルトでつるつるに塗り固められた土地は、おそらくその黒い皮膜の下で怨恨をとぐろのようにまきこんでいることだろうが、その上に立つ私たちも又、歩くか走るか止るかする以外にはない。その時、その細長く続いた空間は、交通の機能そのものとして閉じられ、一方私たちの「灰色の脳細胞」も終にその空間そのものに対するラディカルな問いを発することなく閉じられてしまう。昨年のいつ頃だったか、お茶の水駅に降りて歩き出した時、歩道の真新しいアスファルトが妙に生々しく感じられたことがあったが、そして、「ここも又……」と思わず苦笑してしまったのであるが、今では、ほこりをかぶった歩道に改めて目をやることすらほとんどない。そして、その間に補修された日常はより自然な状態を復元してきたのである。

たかだか道路のことにすぎないが、そのような常日頃何気なく見過してしまうような物の意味をつかみなおさない限り、何事も本質的に変ることはない。それらの物を何気なく見過しているうちに、私たちの意識も又、日常の規範のうちにありながら、それが作りあげられた規範であることを忘れはて、自らのあり様を全体的に問うことを忘れてしまう。私たち内部の規範だけでなく、人為的に作られた制度のように、作られたということが誰の目にも明らかなようなものに対しても、それが日常的に存在すれば、その存在の意味を問わないで過してしまう。たとえば、そのいい例が大学の教師たちである。彼らは日頃、「学問」、「研究」、「教育」というような言葉をふりまきながら、それらを行っている場が一体どんなものか、そして、その「大学」で自分がやっている「学問」が何なのか根本的に問うことがない。毎年毎年、入学試験をやりながら、それがやられていることの意味を考えてみることもない、というよりも、それの行われることが地球の自転のように先験的なこととして、意識のうちにものぼらない。彼らにとって道路がその上を歩くものであるように、入学試験はただやるものなのだ。

どうしてそうなのか。入学試験をやるとは一体何なのか、あなたのやっている「学問」とは一体何なのか、何故それが「学問」なのか、そのような日常を問うところに大学のバリケードはある。かくあるべしと定められた機能を放棄した諸々のもので固められたバリケードは日常を断ち切る、そしてその断ち切った地点からそれまでの日常に対する問いが投げかけられるのだが、それは静止した疑問符としてあるのではない。大学の日常を放棄したその場所は、同時に私たちの内部に固定した日常を放棄する場でもある。そこに運動が始まる。自らの内部に規範として固定した権力を放棄するその瞬間、自己権力獲得の過程に私たちは踏みこんでいるのだが、放棄と獲得の交叉するその場こそ運動にほかならないのである。

（69年2月28日）

ガロ バックナンバー特価サービス!!



1年分を1000円で!!

「**ガロ**」も愛読者の皆様のご支援により創刊以来5年目をむかえましたが、**バックナンバー**をまだお読みでない方のために下記の通り**特価サービス**を行ないます。



白土三平、水木しげる、つげ義春
永島慎二、滝田ゆう、楠　勝平
つりた・くにこ、勝又進、藤沢光男
佐々木マキ、田代為寛、池上遼一、
諸先生の作品の数々をこの機会にぜひ!!



近所の書店へ御注文下さい

＜12冊セット＞

Ⓐセット41年4月号～42年3月号

Ⓑセット42年4月号～43年3月号

1セット　特価1000円(〒共)

Ⓐ Ⓑ セット明記の上代金を添えて直接当社までお申込み下さい。(美本でない本もありますのでご諒承下さい)

申込先・東京都千代田区神田神保町1−55 青林堂